

# 透成血液在宅 助成者に析

森本市議は、「瀧本市長は7月に患者の家族と会われて実情(窮状)をつぶさに聴かれました。全国的にも助成制度のある自治体はありません。もちろん、県下でも、在宅血液透析患者は、本市に一人だけということもあります。導入については医師会との関係もありましようが、是非実現してほしい」と提言し、「見通しはどうですか」と市長の考えを尋ねました。

瀧本市長は、「障害がある人の生活の質の向上を図るための支援は行政の大切な役割と考え、政策の推進に努めているところです。こうした福祉的観点の立場から、今回の助成につきましても、医師会とのコンセンサスを得ながら、福祉基金等の利用も考慮して検討し、要綱を作成して、来年度から実施していきたい」と答えました。



瀧本市長は、「福島第1原子力発電所からの放射能漏れ事故発生以来、本市においても市民の方から「井原市は放射線の測定をしないのか」「市民の安全を守るために放射線の測定をしてほしい」など複数のお問い合わせやご要望をいただいています。市民の方々の声に答えるためにも、10数万円程度の放射線量測定器をできるだけ早く購入し、本市の放射線量の平常値を把握するため、本庁、芳井、美星の両支所の3定点を決め、週に1回程度定期的に測定したいと考えています。また、市民の方から測定依頼があった場合は、職員による出張測定で対応していきたい。基本的には3箇所をと考えていますが、対応できれば他の場所も検討していきたい」と答えました。



# 測定器を購入し放射線量を 定期測定、出張測定も実施

森本市議は、「市が放射線測定器を購入し、定点を指定し平常時の数値を把握し、市民の希望者には出張測定を行ってはどうか。また、多くの方が出入りする学校や公共施設も定点として登録し、測定してほしい」と提言。

井原市議会9月定例会が9月5日から9月26日まで開かれました。森本市議は、平成元年6月定例会の初質問から連続90回目の質問をしました。このたびは、7件質問をしました。その内、できるだけ早い時期とか新年度から実現することがハッキリした答弁がありましたので次に紹介します。尚、7件すべての質問と答弁の内容は、9月15日付けの『しんぶん赤旗 読者ニュース「きずな」』をご覧ください。また、9月29日付け「井原民報」では、9月定例会の様子をお知らせしています。これもあわせてご覧ください。



質問する森本市議

# 日本共産党はこう考えます

しんぶん赤旗  
「主張」より

## サッカー女子代表 選手たちの決意生かすために

今度は、来夏に開かれるロンドン・オリンピックへの出場権を見事に勝ち取りました。

中国・済南で行われていた女子サッカーのロンドン五輪アジア最終予選。日本代表は、負けなしの4勝1分けで1位となり、上位2チームに与えられる五輪への切符を手に入れました。

### “超過密日程” はねのけ

予選独特の厳しい争いに加え、11日間に5試合もこなす“超過密日程”が選手らを苦しめました。これには佐々木則夫・代表監督も「中1日で試合が続く。健康にも良くないし、選手も良いサッカーができない。これを機に検討してほしい」と改善を求めています。

まして、日本の選手たちは初優勝を飾ったドイツ・ワールドカップ(W杯)から最終予選までの約1カ月半、国内の盛り上がりにも忙な日々を送りました。

休息や練習時間も満足にとれないまま臨み、チームは「本調子ではない」(佐々木監督)状態が続きました。そのなかで選手たちは疲れた体にムチ打ち、持ち前のねばり強さとひたむきなプレーで白星を重ねていきました。また、時に主力選手を休ませて若手の出場機会を増やしたことはチーム全体の底上げにもつながりました。



今回、日本代表の心の内には、五輪出場を果たすことへの強い意気込みがありました。それは、せっかくW杯優勝で盛り上がった女子サッカー人気をここで途切らすわけにはいかないという並々ならない決意でした。

主将の沢穂希(ほまれ)選手は最終予選終了後、「日本に女子サッカーが根付き始めていると感じる。プレッシャーもあるけど、若い選手も含め、責任を背負っていかなくてはならない」と口にしています。

彼女たちの強い思いの根っこには、これまでの困難な競技環境があります。

日本にはサッカーを職業とする女子選手はほとんどなく、ほかに仕事をもちながらプレーしています。国内リーグに所属するチームも不況などの影響で休・廃部が後を絶たず、競技や練習の場を探し求めて転々とするケースも珍しくありません。

今の代表選手たちも、そうした悲哀を少なからず味わってきました。だからこそ、人気を一過性のものに終わらせないという決意が、一人ひとりの力を尽くしたプレーに表れるのです。

恵まれない環境下であきらめずに努力をつみ重ねて夢をかなえていく彼女たちの活躍は、東日本大震災後、重苦しさにも包まれた被災地をはじめ多くの日本国民を励まし、感動と希望を与えました。

それだけに、国や自治体は女子サッカーの競技力向上と底辺拡大のための本格的な支援に、乗り出すべきです。

### 五輪へ、課題も見えた

次の目標となるロンドン五輪まであと10カ月余。最終予選を通じて課題もみえてきました。控え選手の能力向上や強い体づくり、そして代表チームへの支援体制の充実も欠かせません。そのためには、男子と比べても少ない強化費をはじめ、財政的な支えが必要です。指導者の育成も同様です。

厳しい条件のなかで、さまざまな期待にこたえようと奮闘する女子イレブン。それを応援するためにも、社会的な支援を求める活動をひろげることが大切です。

この「後援会ニュース」は森本ふみお議員の  
ブログ (<http://jcp-seibu.sakura.ne.jp/morimoto/>) でも見れます。

ご意見・ご要望および情報をお気軽にお聞かせください。